

ベスト・エッセイ2008
日本文藝家協会編

編纂委員

高田宏/林真理子/増田みず子/
三浦哲郎/三木卓

不機嫌の 椅子



光村図書



不機嫌の椅子

ベスト・エッセイ2008
日本文藝家協会編

編纂委員 高田宏 / 林真理子 / 増田みず子 / 三浦哲郎 / 三木卓

光村図書

不機嫌の椅子

二〇〇八年六月二十日 第一刷発行

編者——日本文藝家協会

発行者——常田 寛

発行所——光村図書出版株式会社

東京都品川区上大崎二・一九・九

郵便番号一四一・八六七五

電話〇三・三四九三・二二一一（代）

印刷所——株式会社加藤文明社

製本所——株式会社難波製本

JASRACH0805895-801

©Nippon Bungeika Kyokai 2008 Printed in Japan

ISBN978-4-89528-419-6 C0095

価格はカバーに表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は禁じられています。

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

ベスト・エッセイ2008

不機嫌の椅子

目次

秋のモンタージュ

坂上 弘 10

ある古本屋の一日

向井 透史 17

命、守れるか、小さな二棟

永井 路子 23

飲食の業

島田 雅彦 27

上野鈴本と私

小沢 昭一 31

お酒が吞めず、残念

秋山 駿 36

「強い男」のにおい

北原 亞以子 41

エドと吉原

高橋 治 46

遠慮の名人 私の後悔

ドナルド・キーン 51

マクのこと

しまおまほ 55

「画」から「音」へ宗旨変え

鴨下 信一 62

親からの頼まれごと

増田 みず子 68

「折々のうた」を終って

大岡 信 73

共同の旅はつづく——作家・小田実さんを悼む

鶴見俊輔

77

カンデインスキーの膝

荻野アンナ

80

「快」

南木佳士

87

「濡れ落葉」減り 共学風の夫婦

黒井千次

90

満鉄社歌

三木卓

95

片仮名スキツチ

アーサー・ビナード

100

枯野の夢

長谷川權

103

六十二年前の八月十五日

瀬戸内寂聴

107

記憶する体

朝比奈あすか

112

禁止事項を作る

川本三郎

119

均一と格差

大石 静

125

銀座の思い出

吉本隆明

129

切手少年の頃

出久根達郎

134

「河合心理学」 未完が残念——河合隼雄さんを悼む	梅原 猛	139
黒羊羹 ようかん を切ったような	清川 妙	143
高齢者の部屋	野見山 暁治	148
言葉は無力なのか	宮内 勝典	153
「こないいい奥さん」	阿川 弘之	157
サブちゃん あるいは、ゴルフ場の城山さん	佐野 洋	162
『されど われらが日々——』 再会	柴田 翔	171
東京人の感性	大村 彦次郎	178
死への恐れ	梯久 美子	182
澁澤宇宙の秘密へ	高橋 睦郎	185
写真審査員	小林 紀晴	192
書斎の机	津村 節子	197
静寂の記憶	竹西 寛子	202

八年前の遺言状

長部日出雄

209

あこのろの銀座

佐藤愛子

214

タウン誌の追悼特集

井出孫六

220

タクシードライバー

俵 万智

222

煙草^{たばこ}

小川国夫

229

短歌という詩型

辻井 喬

234

ダン爺の青春

やなせたかし

239

父の仕事

佐藤賢一

244

ついに掴みきれなかった人

大庭みな子

247

電車内の会話（男の子同士篇）

穂村 弘

251

なぞのおとん。

本上まなみ

255

独裁者コレクシヨン

鹿 島 茂

260

地唄〈黒髪〉の想い出

三浦哲郎

264

春一番

伊藤桂一

269

鈍いかもしれない

金井美恵子

273

子供おとなのおとな顔

萩原朔美

277

吉村家の絵

大河内昭爾

286

禪僧が女を抱いて川を渡る時

柳田邦男

290

冬空紀行

蜂飼耳

296

不死の肖像

四方田犬彦

301

二つの日常——死生観の揺れと永遠のいま

辺見庸

306

不機嫌の椅子

林真理子

310

僕が愛した宇宙人

小松左京

315

漫画の日々

伊藤比呂美

320

翁面 美しさの秘密

山折哲雄

322

悪口コンテスト

村松友視

326

『坊っちゃん』のこと

還つてゆくところ

もういない、でもまだいる

山羊小母たちの時間

わが師、土方巽

人は往来

ラッパ水仙が咲いて

女には冷たいという非難に答えて

若水をくむ

忘れ去られた閨秀作家

まぼろしの土地

丸谷才一

高田 宏

川上弘美

馬場あき子

唐 十郎

古井由吉

司 修

塩野七生

岡野弘彦

池内 紀

高井有一

331

336

340

344

349

354

359

363

369

372

377

装幀Ⅱ三村淳・三村漢

装画Ⅱ古澤美香

「を」10」二〇〇二年作（部分）

装画撮影Ⅱ内田芳孝

ベスト・エッセイ2008

不機嫌の椅子

秋のモンタージュ

坂上 弘

昨年は、日本文藝家協会の理事長にえらばれて大変でしようと声をかけられる機会が多かった。たしかに文芸家の職能を守り文化の向上をはかる協会として、取り組みまねばならないことは多い。しかし実際に大変なのは見識と実行力を発揮して支えている理事や評論員の皆さんである。著作権や国語、言論の問題に対して、協会の公益に資する役割はこれからますます大きくなってくるので、私もできるかぎりのことはするつもりだ。

昨年九月にベルリン国際文学祭に行ってみた。この文学祭は始まってまだ六年目で、日本ではあまり知られていないようだ。ここで私は日本ペンクラブの会長に就任したと紹介され、あわてて訂正してもらい、文藝家協会とは何をするところかを説明しなければならなかった。以前、吉村昭さんが文藝家協会で税務委員長という大役を担っていて、年に一

度国税庁と懇談の席をもつという話をしておられた。文芸家にとってはコーヒー一杯でも構想をうかべるためのもので必要経費にならざるはなし、と頭の固い役人にわからせるのに苦勞するよ、と含羞一笑していわれるのを聞き、思わず、国税庁長官が吉村さんの前でたじたと becoming している光景が目にかんだものだ。しかし、ベルリンの文学祭関係者にそんなふうには、文学者にかかる税金や、原稿料のことや、健康保険からお墓のことまで取り組んだ歴史があると説明するのは無理というものだ。著作権の管理や保護期間を没後七十年に延長してこれからの社会にそなえるという課題に取り組んでいると説明した。

一週間ぐらいでは東西一体になったベルリンの歴史はわからないだろうと思い、出発かずに、もつぱら人に会うゆつくりした日々を送った。そもそも文学祭に来ることになったのは、審査委員の一人であるハンガリーの作家クラスナホルカイが招いてくれたからだ。彼の娘のカタさんが、最初の日から案内役を買ってくれた。彼女は父親によく似た青い瞳に秀でた額の美人で、働いている事務所から休暇をとって待っていてくれた。作家の家という芝生の庭にバラの植込みのある館へ連れて行ってくれ、私を作家の一人として案内してくれ、屋外のテーブルではじめて会う日本人からいろいろ話をききたがった。どんな物語を書いているの、と興味津々だった。

彼女がクリスト&ジャンヌ・クロードの仕事が好きでそれをテーマにしながら資格をとろうとしているので私たちは話がはずんだ。私はこの日本でも野山に傘の行列をつくった芸術家夫婦のことは殆ど知らないが、彼等のサポーターを任じているベルギーの印刷会社の社長が私の友人であることもあって、好きだという意味がどういふ感じかわかる。

五年前に私の友人はクリスト&ジャンヌ・クロードの作品のカレンダーをつくっているし、自宅のあちこちにはドローイングがかかっている。ニューヨークにあるクリストの質素なアトリエを訪ねている。私の友人と目の前にいる若い娘さん二人のファンに共通しているのは、クリスト&ジャンヌ・クロードにすっかりほれていくということだ。私の友人は、二人がベルリンの旧ドイツ帝国議会議事堂を白い布で包むことに成功したときにそれを観に行き、夢中になって何日も眺め、小さなカメラで何枚にも分けて撮り、それを引きのばして巨きなカラージュ写真をつくり、額に入れ、私へ贈物として送ってきた。

こういうふうになんを巻きこむ体験を創造する芸術活動を私はとくに研究しているものではないが、ことばにならないほど豊かなものに実際に触れた友人や娘さんの興奮に、あらためて新しいものを感じた。

ベルリン国際文学祭の期間中もう一人ギリシャ系の名をもつ若い娘さんに会うことにな

つていた。大学では日本の私小説で修士論文を書いているので参考にしたいと質問状を前もって私のホテルに送ってきた。それは次のようなものだった。

——これまで私小説というジャンルはどちらかと言えば批判的に評価されてきました。けれども他方では大衆文学対純文学論争を読みましたけれどもそこで私小説はむしろ純文学として扱われています。坂上さんはその定義上の矛盾についてどうお考えですか。

私は日本語のワープロで打たれたその気さくな文章を読んでなんともうれしくなった。一体どんな学生がこういう質問を出してくるのだろう。

——坂上さんは私小説作家と聞いていますけれど、みずから私小説作家としてみなしておられますか。それとも評論家によってそう評価されてきたのでしょうか。としたら最初から意識して私小説という方法を選択されたのですか。

——このジャンルは今でも有効つまりアクチュアルなのでしょうか。読者側に私小説を読んでいるという特別な意識があるのでしょうか。そして私小説の今後の可能性についてどうお考えですか。

私はこうした質問に夢中になるほうだ。最後の、私小説は時代おくれではないか、という意味のズバリ質問に緊張しつつ、レクチュアのためにペーパーをつくってその学生がく

るのを待っていた。

彼女は知的でエキゾティックな美人だった。髪は黒く横顔はギリシャ人の彫刻のように鼻筋がとおっている。ベルリン見物もしないで待っていて、会ってよかったと思った。話はずんで、私は自分が私小説作家だといわれていることを思い出しつつ話していた。

戦後の日本では、ジャンルのちがう芸術家、たとえば武満徹という作曲家までが、私たちの世代の「私」の文学をよく理解してくれていたのを知ってください。彼が、私小説に感銘するのは私小説が「私」を殺すことの美をもっているからではないか、といったことがあるのを知ってください。彼の若い頃のエッセイにあります。

古稀になった私が、孫にちかい年齢の西洋の娘さんに自分の生きてきた小説体験をくどくどと語っている、という図は、文学への愛着ということ以外のなにものでもない。

さて日本に帰ってきて秋も深まった頃、偶然にも私はクリスト&ジャンヌ・クロードの講演に出会うことができた。京都造形芸術大学にきていた二人が慶應義塾大学の日吉キャンパスまでやってきてくれたのだ。時空がつながっているのが面白かった。私はベルリンで会ったカタに次のように手紙を書いた。

「教室での二人のプレゼンテーションはすばらしいものでした。PCのデジタル画像は色